

峠の祭祀と古東山道

小林 幹 男

はじめに

古東山道は、大和政権が東国計略のために、4～5世紀ごろ開いた道であり、海沿いの東海道に対して、中部の山岳地帯を通る東の山道である。古東山道の経路については、史的研究の論拠となりうる確かな史料はない。しかし、直ちに史的事実とは認められないが、『古事記』の小碓命（倭建命）、『日本書紀』の日本武尊の東征物語の記事によって、およその経路をうかがうことができる。

すなわち、古東山道は、大和を発し、美濃から科野坂（神坂峠）を越えて科野（信濃）に入り、碓日坂（入山峠）を越えて毛野に通じ、蝦夷地に向っていたと考えられる。

科野坂は、美濃との境の神坂峠であり、碓日坂は毛野との境の入山峠と考えられる。この峠道は、令制東山道にも利用されていたので、『延喜式』に詳しく記されている。しかし、信濃の古東山道は、科野坂と碓日坂の記事のみで、科野（信濃）国内の経路は明確でない。

幸い、蓼科山麓に残る祭祀遺跡群が、その歴史の記事の空白を埋めてくれる。すなわち、蓼科山麓の雨境峠付近に、鳴石・勾玉原・赤沼平・鳴石原・鍵引石の5遺跡があり、大門峠付近にも池ノ平・御座岩岩陰の2遺跡がある。そして、その中間の草原に箕輪平遺跡があり、これらの遺跡は、採集された祭祀遺物（幣）や土器などから古東山道に関係する遺跡と考えられる。

そして、これらの遺跡のうち、鳴石遺跡と鍵引石遺跡は、磐石と考えられる巨石をともなう祭祀遺跡として知られ、勾玉原遺跡は、豊富な祭祀遺物を出土した遺跡として著名である。

古代の人びとは、荒ぶる山の神、峠の神を畏敬し、険しい山道や峠を越える際に、石製模造品の有孔円板（鏡）・剣形・玉などの祭祀遺物を神に手向けて旅の安全を祈ったのである。

また、雨境峠の赤沼平遺跡と鳴石原遺跡、白樺湖畔の池ノ平遺跡は、農業用溜池や牧地の造成によって大きく変化している。しかしこれらの祭祀遺跡も、古代における峠の祭祀の研究と、古道との関係を検証する上で、きわめて重要な遺跡である。

さらに、これらの遺跡の中間の猿小屋地籍・女神湖東岸・筑波大学附属高等学校桐陰寮上の3箇所から、古代の役人、あるいは兵士の通行をうかがわせる7～8世紀ごろの蕨手刀が出土している。

本稿では、長野女子短期大学の開放講座で扱った内容に補筆し、これらの遺跡の調査資料、古道調査のために、20地点を選んで設定したトレンチの調査記録、大起製貫入式土壌硬度計による硬度調査結果などを総合して、古東山道の経路と古道の構造を考証することにしたい。

1 古東山道

『続日本紀』第二は、信濃の古道について、大宝2年（702）12月壬寅（10日）の条に、
「始めて美濃国岐蘇の山道を開く」

と記し、『続日本紀』第六・和銅6年(713)7月戊辰(7日)の条にも、
「美濃信濃二国の堺、経路険隘にして往還艱難なり、仍て吉蘇路を通す」
と記している。

令制による信濃の東山道、すなわち駅路は、これらの記事により、大宝2年(702)12月に、はじめて開かれたと考えられている。

古東山道に関する記録は、前述のとおり、『古事記』小碓命(倭建命)の記事、および『日本書紀』景行天皇40年の日本武尊の記事などの東征物語の行路に、わずかに記され、『日本書紀』景行天皇55年春2月の彦狭嶋王の記事にも、その経路をうかがう記述がある。これらの記事は、そのまま史実とは認め難いが、およそ古代東国への経路を知ることができる。

一般に古東山道は、古墳時代に開かれ、大和を出て美濃から神坂峠(科野坂)を越えて科野に入り、伊那谷から諏訪を経て蓼科山麓の雨境峠を通り、望月に下って瓜生坂から佐久平を抜けて入山峠(碓日坂)を越え、毛野に通じていたものと考えられている(図1)。

蓼科山麓の祭祀遺跡群は、現存する出土遺物がきわめて少なく、年代の確定は困難であるが、およそ6世紀から7世紀初頭ごろの遺物を主体とし、一部に4世紀後半に遡る遺物が含まれているとの所見もある。従って、この遺跡群に関係する古道は、令制東山道が開かれる以前につくられた古道、すなわち「古東山道」と考えられる。

蓼科山麓の古道の道筋は、祭祀遺跡を点とすれば、この点と点を結んだ線の付近を通過していたものと考えられる。すなわち、蓼科山麓の古東山道は、前述の各遺跡を線で結べば、まず諏訪から白樺湖畔にのぼり、ここに御座岩岩陰遺跡がある。ここから諏訪富士ともいわれる円錐形の蓼科山が、丘陵の上に美しく望まれる。蓼科山は、まさに神の山・母なる女神の山である。

池の平遺跡は、御座岩岩陰遺跡の北東方、白樺湖の北岸にあり、三本松などの独立峰(熔岩円頂丘)の南裾に位置する。三本松から緩い北斜面を下って本沢を渡ると箕輪平遺跡があり、蕨手刀(東京国立博物館蔵)出土地の猿小屋、女神湖畔の赤沼平遺跡を経て、雨境峠最高地点の北側に位置する勾玉原遺跡に達し、そこから北東斜面を下ると鳴石遺跡に通じている。この道筋は、佐久・小県郡境に沿った尾根の道・嶺道である(図1)。

さらに、もう一筋の古道は、箕輪平付近で嶺道と分れ、蕨手刀出土地の筑波大学附属高校桐陰寮上の二松学舎寮前付近・女神湖東岸を通り、現在の雨境峠の南裾の鍵引石遺跡を経て、峠の最高地点付近にある鳴石原遺跡、そこから緩やかな斜面を下ると鳴石遺跡に通じている。この道筋は、平原の道・山裾をとる草原の道である(図1)。

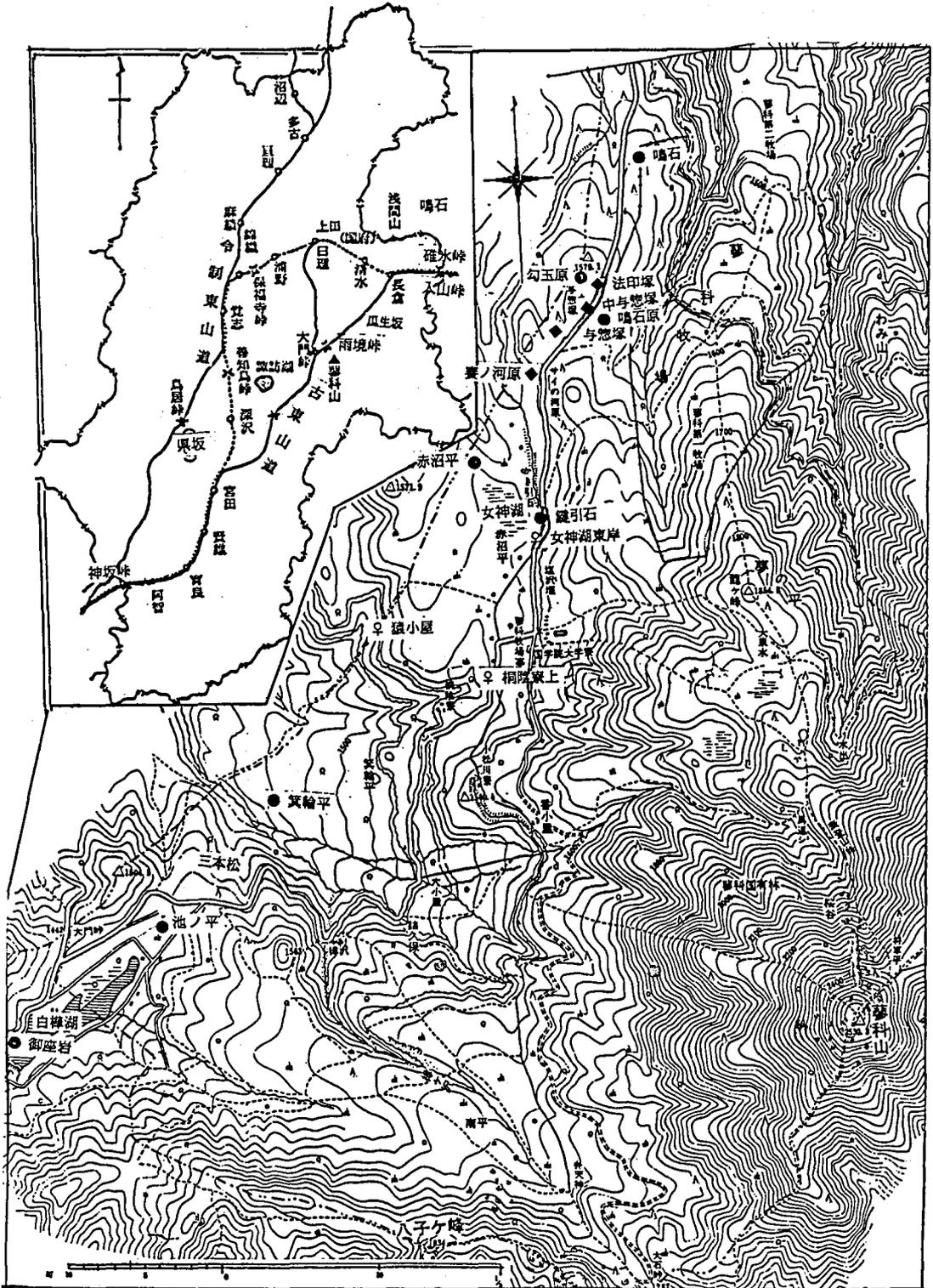


図1 蓼科山麓の祭祀遺跡と蕨手刀出土地分布図

祭祀遺跡群と蕨手刀の出土地は、北方から記すと、鳴石・勾玉原・赤沼平の祭祀遺跡が、小県と佐久の両郡境の尾根にほぼ一直線に並び、その延長線上に蕨手刀（東京国立博物館蔵）出土地の猿小屋がある。

そして、郡境の嶺道をさらに延長すると、土師器などを出土した箕輪平遺跡があり、そこから本沢を越えて三本松にのぼると、白樺湖畔の池ノ平遺跡と御座岩岩陰遺跡の2つの祭祀遺跡がある。

また、鳴石・鳴石原・鍵引石などの祭祀遺跡は、蓼科山麓の北西斜面に一直線に並び、その延長線上に蕨手刀出土地の女神湖東岸があり、桐陰寮上の二松学舎寮前がある。

蓼科山麓における古道の調査は、祭祀遺跡群を点として、この点を通る線の位置を地図上で確め、再三にわたって実地踏査を行い、現地の状況と古道の痕跡を追究することからはじめた。そして、調査地点の選定、範囲の決定には、調査区の大部分が国定公園内であるため、トレンチが灌木などの植物にかからないようにするなど、自然への影響を最小限にするよう配慮し、各時代の古道の比較研究をも考えながら、調査区20地点を選定して発掘調査を実施した。

一志茂樹氏は、この古道の性格について、雑誌『信濃』(第5巻第7号)に、

「須芳山の嶺の道は、征夷路線としての性格をになって重視されたものである。」

と述べ、大和の王権が東国計略のために用いた軍用道路としている。

2 峠の祭祀遺跡

(1) 鳴石遺跡

鳴石遺跡は、雨境峠の北側にあり、蓼科山麓の広大な北西斜面に位置している。

鳴石は、鏡餅状に重ねられた青灰色角閃石複輝石安山岩の2個の巨石（鳴石）と、巨石の周囲につくられた集石遺構を主体とし、巨石（以下巨石Ⅰとする。）の北西約10mにも球状の巨石（以下巨石Ⅱとする。）と集石遺構（以下集積Ⅱ遺構とする。）がある。

巨石Ⅰの下の石は、東側部分が舌状に競り出し、平面は隅丸三角形を呈する南北径295cm、東西径306cmの巨石で、上の石は、南北径が235cm、東西径が218cmを測り、平面は楕円形である。この巨石Ⅰは、二つの自然石が、調和よく鏡餅状に重ねられ、一見自然状態の巨石のようにみえる。しかし、二つの巨石は、熔岩構造、割れた部分の形状・寸法が異なり、明らかに別の巨石を重ねたものである。

このように巨石Ⅰは、異なる二つの巨石を重ねているので、上の石の端を敲打すると、二つの巨石の割れ目の隙間に反

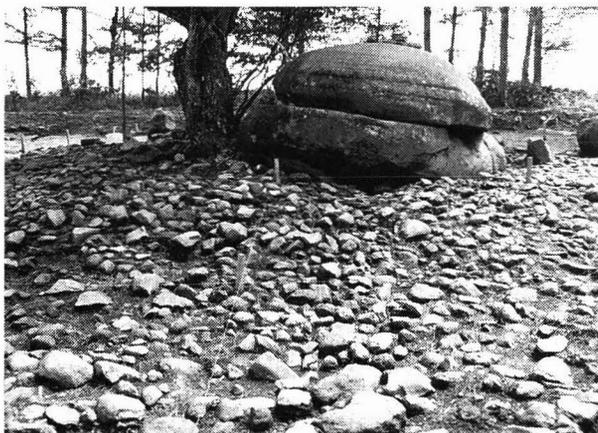


写真1 巨石Ⅰ（鳴石）と集石Ⅰ遺構（北西より）

響して妙なる音を発し、鳴石の名の由来ともなっている。

巨石Ⅰの周囲の集石遺構（以下集石Ⅰ遺構とする。）は、外縁部の径が、南北およそ10m、東西およそ11mの方形を呈し、巨石Ⅰの周囲では、さらに上面の径が7m、高さ50cmほどの円形につくられている。今回の調査では、巨石Ⅰの構築法と集石Ⅰ遺構の構造を解明するため、巨石Ⅰの南寄りに東西にトレンチを設定して検証した（図2）。

この結果、巨石Ⅰの東側では、およそ4mの範囲に、深さ最大1mの掘り込みが、巨石Ⅰに向って斜に掘られ、西側では30cm強ほどの掘り込みを認めた。

掘り込みの全体の規模は、径およそ8mで、巨石Ⅰの東側の外縁部では4層に、巨石Ⅰよりおよそ1mの範囲では3層に、古墳の版築法と同様の手法で強く固めて埋め戻されていた。

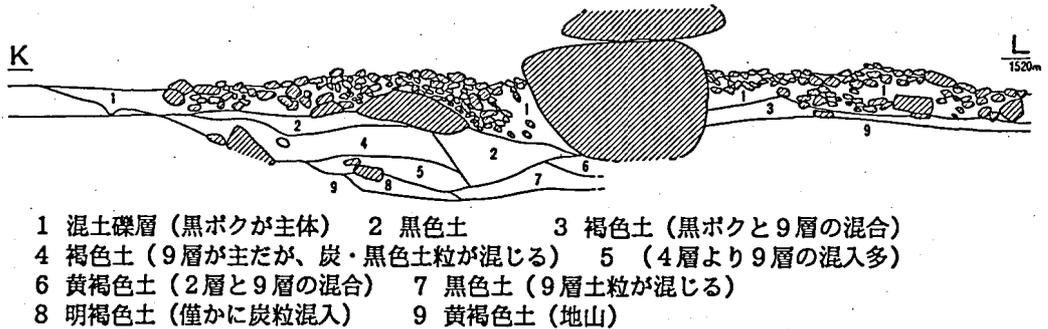


図2 鳴石遺跡・トレンチ南壁実測図

そして、巨石Ⅰの東側では、およそ巨石から1mの位置に、まず長径1mほどの大きな石を置き、その石を覆い隠すように、人頭大から拳大の円礫を30~50cmほどの厚さに積んで、集石遺構をつくり、西側では、掘り込みを10cmほど埋め戻し、その上に人頭大から上面では拳大の円礫、または亜円礫を積んでいることが確認された。

石積みの周辺部は、末端に30cm前後の長方形の角礫を配して、集石Ⅰ遺構の輪郭をつくっている。従って、巨石Ⅰ周辺の集石Ⅰ遺構も、一定のプランをもって築造された人工的な遺構であることがわかる。巨石Ⅱと集石Ⅱ遺構の構造も、基本的には巨石Ⅰ・集石Ⅰ遺構と同様である。

巨石Ⅰと集石Ⅰ遺構の関係は、峠の祭祀のための磐石と、磐境的な性格をもった巨石と集石遺構で、築造年代は、出土遺物などから6世紀後半から7世紀ごろと考えられる。

また、巨石Ⅰと集石Ⅰ遺構の構築年代は、構築法と構造などから、同時期と推考され、差があっても極めて小さいものと考えられる。

鳴石遺跡の採集遺物は、今回の調査の出土遺物を含めて剣形2・有孔円板1・白玉3・須恵器片3・土師器片1・古銭（寛永通宝）6などであり、その他にも大場磐雄氏・藤森栄一氏の著書に、遺物採集の記述はあるが、所在は確認できない。

(2) 鍵引石遺跡

鍵引石遺跡は、雨境峠の南裾にあり、鳴石遺跡と雨境峠の南北に相対する赤沼（現女神湖）の北東部に位置している。

鍵引石遺跡の主体部分の巨石（鍵引石）は、県道の改修工事によって東側が道路下に埋まり、3分の2ほどが塩沢堰の右岸に、船の舳のように競り出している。鍵引石は、長径がおよそ5 m、短径が3 m、厚さ1.5 mの青灰色の輝石安山岩の巨石である。

鍵引石遺跡の出土遺物は、明確に「鍵引石遺跡出土」と記録されたものはない。

八幡一郎氏は、『北佐久郡の考古学的調査』に、

「有孔円盤 雨境峠に近い赤沼から採集したと伝えられる2.5種の破片である。共に二つの孔が貫通している。

小玉 雨境峠付近から最も多く採集されているのは、滑石製の薄い小玉の類であった。（中略）赤沼採集のものは11粒を第78図に掲げた。赤沼出土例の内には径6 耗に達し、短い管玉と見られるもの4 個、薄い小玉は滑石製4 個、粘板岩製3 個計7 個である。」

とあり、東京国立博物館所蔵の遺物の中にも、「北佐久郡¹⁰蓼科山麓畑中」とある剣形3 個・臼玉9 個・有孔円板3 個の滑石製模造品がある。今回の関連調査の結果では、これらの遺物も鍵引石遺跡の遺物と推考される。さらに、蓼科在住の藤沢万佐男氏は、鍵引遺跡周辺の女神湖東岸から古式の須恵器の碗の破片と土師器の甕・坏の底部破片（図3 - 6 ~ 8・13~）などを採集している。

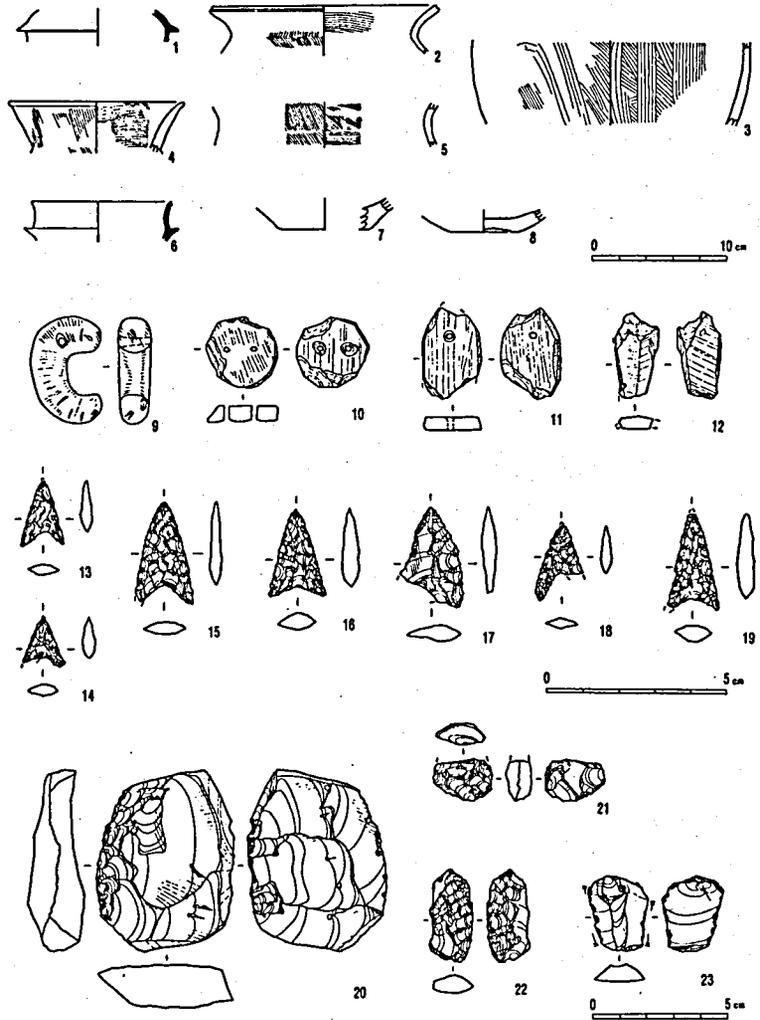


図3 赤沼平遺跡・鍵引石遺跡出土遺物実測図

(3) 勾玉原遺跡

勾玉原遺跡は、小県・佐久両郡境の標高1,579.1mの三角点附近とする大場磐雄¹¹氏の説、および中与惣塚附近の狭い範囲とする桐原健¹²氏の説がある。両説は、標高1,579.1mの三角点附近とする点では類似するが、後説の中与惣塚附近は標高が1,575m以下であり、付近に三角点はなく、地籍の字名も一致しない。

従って、勾玉原遺跡は地籍の字名、三角点の位置、藤森栄一¹³氏・八幡一郎¹⁴氏らの論文の記述、遺物を採集した地元の古老¹⁵の証言などから前説の位置とするのが妥当である。

また、中与惣塚付近に所在する遺跡は、地籍の字名から後述の鳴石原遺跡のことであろう。

遺跡の範囲は、遺物の採集された範囲から推定して、南北が標高1,579.1mの三角点附近から峠の最高地点1,581.7mの北方付近までのおよそ200m、東西は郡境付近から尾根の頂上よりやや東側までのおよそ70~80mと考えられる。

採集された遺物の大部分は、現在散逸して所在もほとんど不明であるが、その一部の剣形9個・有孔円板1個・管玉2個・白玉25個が立科町細谷の山浦清子氏宅に保管されている(図4-1~34)。

また、今回の調査は、遺跡の北西端で行われ、第2層褐色土層上面の黒色土層の浅い地層から須恵器の坏破片など6点と黒曜石片1個が検出された(図4-1~2)。このことは、用水堰の嶽普請の芝土採取の際に、芝土直下の浅いところにあった遺物が、滅失した可能性もある。

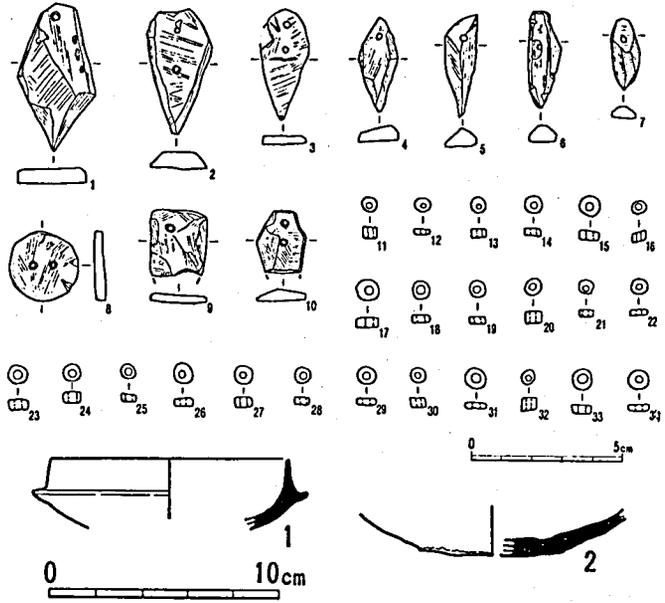


図4 勾玉原遺跡出土遺物実測図

(4) 赤沼平遺跡

赤沼平遺跡は、女神湖西岸の佐久・小県郡境に接する標高1,540m付近にあり、勾玉原遺跡と蕨手刀出土地の猿小屋地籍を直線で結んだほぼ中間点に位置している。

赤沼平遺跡の採集遺物は、勾玉1個・滑石製の有孔円板1個・剣形破片2個・須恵器の坏の破片1個・土師器の甕の破片3個などで(図3-1~5・9~12)、女神湖中から壺鏡の破片なども採集されている。須恵器の坏の破片には、初期様式¹⁶の特色を示すものもある。

(5) 鳴石原遺跡

鳴石原遺跡は、雨境峠の最高地点・標高1,578.2mの北側付近を中心にし、鳴石遺跡と鍵引石遺跡のほぼ中間点に位置している。この付近では、明治11年(1878)から明治16年ころに執筆された『長野県¹⁷町村誌東信篇』をはじめ、藤森栄一氏の『古道』に、「鏡(筆者注 有孔円板)・剣・小玉など15~6個」を採集したとあり、八幡一郎氏の

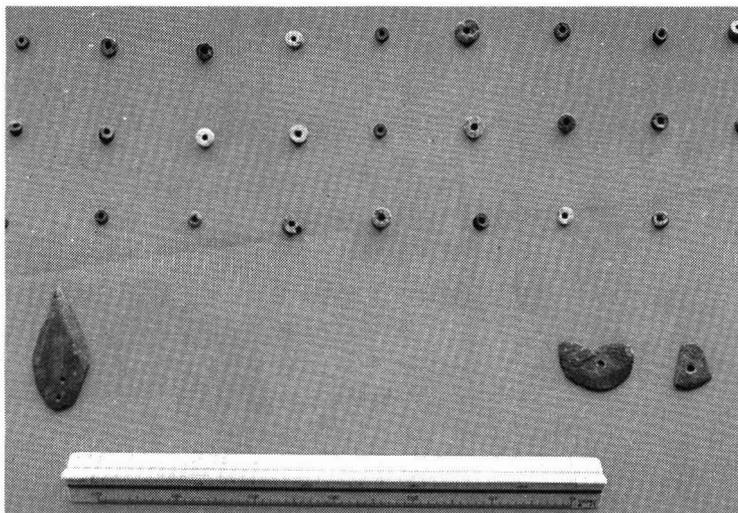


写真2 鳴石原遺跡出土遺物(上田市立国分寺資料館蔵)

『北佐久郡の考古学的調査』¹⁹にも、「小玉40粒」などの遺物の採集が記されている。

現在所在が明らかな採集遺物は、上田市立国分寺資料館蔵の剣形の破片1個・有孔円板1個・小玉27個、長門町古代ロマン体験館蔵の勾玉2個・管玉3個と白玉などである。

(6) 箕輪平遺跡

箕輪平遺跡は、赤沼平遺跡と蕨手刀出土地の猿小屋地籍を直線で結んだ延長線上の草原に位置している。遺跡の南側には、穴小屋付近から発した本沢が、三本松との間に深い谷を刻み、遺跡の南西付近で樽ヶ沢と合流し、大門川に向かって北西流している。

箕輪平遺跡の出土遺物は、土師器の小破片で、4世紀後半ころに比定されている神坂峠出土の土師器の台付甕に類似するとの所見もある。

また、この遺跡付近の割橋地籍で、昭和28年(1953)に児玉司農武氏が、平安期の土師器の破片と元祐通寶を採集している。

(7) 池ノ平遺跡

池ノ平遺跡は、白樺湖の北岸にあり、かつて一帯は音無川の清流に臨んだ草原であった。しかし、現在は白樺湖の造成や観光開発によって大部分が駐車場などになり、遺跡の範囲は明らかでない。

この遺跡で採集された遺物は、剣形2個・有孔円板1個・石斧形の遺物3個・須恵器と土師器の坏や碗・甕などの破片で、土師器の坏片には内黒の遺物が含まれている。

(8) 御座岩岩陰遺跡

御座岩岩陰遺跡は、白樺湖南西岸の標高1,420m付近にあり、現在は茅野市地籍になっている。

遺跡は南北に並立する熔岩塊群からなり、周囲から縄文・弥生時代の遺物とともに土師器や須恵器・剣形・有孔円板などの石製模造品が出土している。

3 蕨手刀出土地

(1) 猿小屋地籍

猿小屋地籍は、女神湖畔の赤沼平遺跡と本沢北岸の箕輪平遺跡を直線で結んだほぼ中間点にある。蕨手刀の出土状態は、必ずしも明確ではないが、昭和30年5月ころ、猿小屋隧道の掘削時に発見されたと伝えられている。

『北佐久郡志』は、「昭和30年5月小県郡大門村猿小屋地籍の雨境峠に近い所から総長48.7cm、身長36.5cm、茎長11.7cm、身幅4.2cm、鐔厚0.5cmの鋒両刃の大刀を発見した」と記している。この蕨手刀は、昭和33年（1958）に東京国立博物館に納められ、現在表慶館の2階に陳列されている。

(2) 女神湖東岸

昭和18年（1943）赤沼湿原に農業用溜池を築造するため、現在の女神湖東岸の丘を削って築堤工事用の採土を行った際に、細身で長さ1尺4～5寸（約42～5cm）の蕨手刀を発見した。この蕨手刀出土地は、鳴石原遺跡と鍵引石遺跡の延長線上にあり、古道の位置を推考する上で極めて重要であるが、蕨手刀は現在所在が不明である。

(3) 桐陰寮上

昭和39年（1964）筑波大学附属高等学校桐陰寮の上、すなわち現二松学舎寮前で、大門石の採土を行っていた際に発見されたと伝えられている。この出土地点は、鍵引石遺跡と女神湖東岸の蕨手刀出土地を結んだ直線をさらに南に延長した位置にあり、古道の推考の上に重要である。しかし、この遺物も現在所在が不明である。

4 古道の調査

(1) 鳴石Ⅲ地点

鳴石Ⅲ調査点は、鳴石遺跡の北方約220mに位置する北斜面である。推定路面の両側には、幅50～60cm、深さおよそ30～50cmの溝状遺構があり、溝心間幅は410～415cm、推定路面は365cmを測る。大起製貫入式硬度計による硬度調査数値（以下

深さ cm	W					
	0	1.0	2.0	3.0	4.0	5.0
2.5	2.0	3.0	1.5	1.5	1.5	3.0
5.0	2.0	4.0	2.0	1.5	2.0	5.0
7.5	3.0	5.0	3.5	4.0	3.5	5.0
10.0	7.0	5.5	5.5	5.0	5.5	6.0
12.5	7.0	8.0	6.0	6.0	6.0	6.0
15.0	7.0	8.0	8.8	7.0	8.8	7.2
17.5	7.0	9.0	11.0	9.0	11.0	8.0
20.0	7.0	9.0	13.5	9.0	13.5	8.0
22.5	7.0	9.0	16.0	14.5	16.0	8.0
25.0	7.0	7.5	16.5	14.5	16.5	9.2
27.5	7.0	9.5	18.0	16.0	18.0	9.2
30.0	7.0	15.0	20.0	16.0	20.0	13.0
32.5	7.0	18.0		17.0		12.0
35.0	7.0	20.0				13.0

表1 鳴石Ⅲ地点の硬度数値表

硬度と略記する)は13.5~20で、灰褐色を呈し、土間のタタキ状に堅く締っていた。地層が灰褐色を呈するのは、表土層の黒色土と下層の黄褐色土が、人の通行などによって捏ね合わされてきたものと考えられる。

(2) 鳴石遺跡

鳴石遺跡では、調査区の北東で、幅が30~60cm、深さ20cmほどの並行に走るU字形の溝状遺構が検出された。溝心心間の幅は、380~400cmを測り、路面と推定される部分の幅は340~350cm、走行方位はS-10°-E、暗褐色で土間のタタキ状を呈し、硬度は、溝の西外側の8~9に対して推定路面は10.5~17.0であった。

(3) 勾玉原 I 地点

勾玉原 I 調査点は、勾玉原遺跡の北側に隣接し、山側に土留めと思われる長径30~40cmの大きな角礫を列状に並べ、谷側にも簡単な溝状遺構が検出された。列状の礫と溝の心心間の幅は405cm、推定路面は暗褐色を呈し、堅く締め、幅およそ360cmを測る。

この年度の調査は、硬度計による調査は実施していないが、その延長線上約50m南方に位置する勾玉原遺跡内の推定路面の硬度は12.5~19であった。

(4) 鍵引 II 地点

鍵引 II 調査点は、赤沼平遺跡の北方に位置し、西の谷側に角礫を用い

深さ cm	cm	W			E		
		0	1	2	3 m		
2.	5	5.0	5.0	5.0	3.0		
5.	5	5.5	5.5	6.0	3.5		
7.	5	5.5	5.0	9.0	3.5		
10.	5	5.5	5.0	9.0	3.5		
11.	5	8.0	5.0	9.5	6.0		
11.	5	7.5	7.0	9.5	11.5		
12.	5	8.0	12.0	10.5	11.5		
22.	5	9.0	11.5	16.0	13.0		
22.	5	9.0	11.5	16.0	13.5		
23.	5	9.0	11.5	17.0	15.0		
33.	5	ston	ston	ston	ston		
32.	5	ston	ston	ston	ston		

表2 鳴石遺跡の硬度数値表

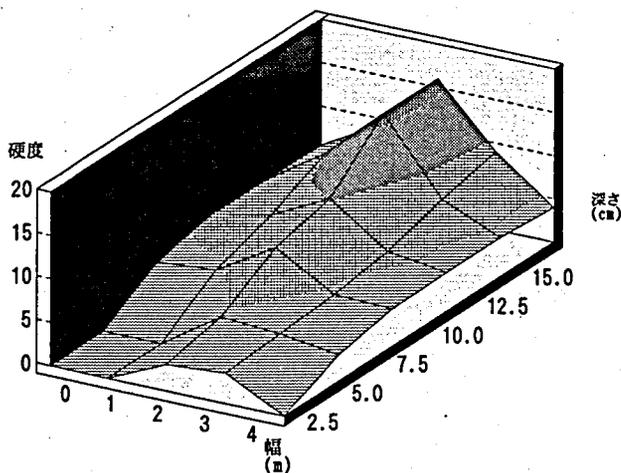


図5 鳴石遺跡の硬度グラフ

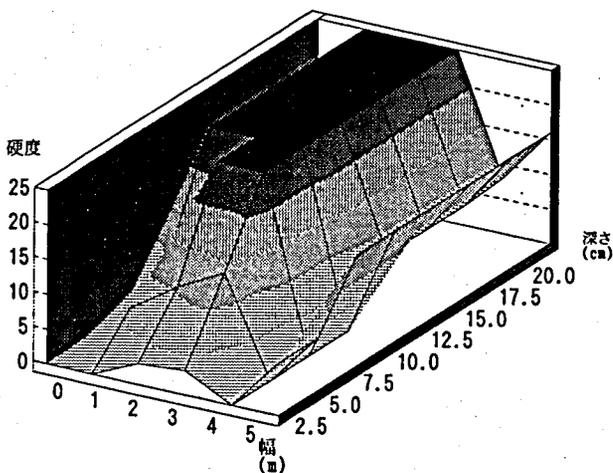


図6 鍵引II地点の硬度グラフ

て築いた石組をともなう幅60cm、深さ35cmの溝状遺構があり、山側に幅50cm、深さ32cmほどの溝状遺構が検出された。溝心心間の幅は435cm、推定路面は暗灰褐色を呈し、硬度は10～25で、全体重をかけてようやく硬度計の先が突き刺さるほどに堅く、路面の幅はおよそ370～380cmを測る。この地点の北西側は、広い湿地帯で、推定古道は郡境沿いの斜面にあり、山見の人以外はほとんど入ることのなかったバーজনな地籍である。

(5) 箕輪平遺跡

箕輪平遺跡は、赤沼平遺跡と蕨手刀出土地の猿小屋を結んだ線を延長した平原に位置し、トレンチ南側のB-2区で、灰褐色土層の上面から土師器片を検出した。この地層の硬度は5.5～9.5で堅く締まり、遺跡の一部分と考えられる。

また、遺物包含層の下層で、硬度9.5～10.5の堅い地層を認めたが、古道と考えるには硬度が小さく、さらに周辺地籍を精査して判断する必要がある。

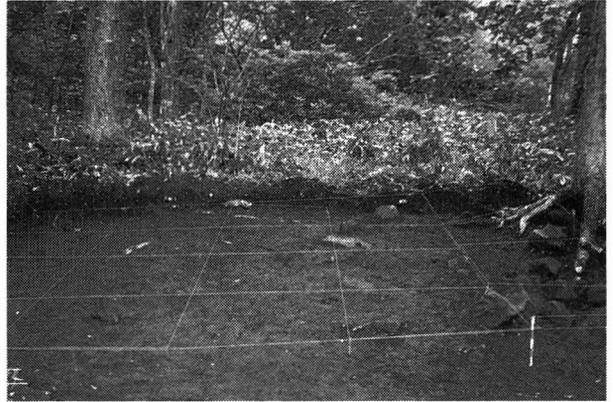


写真3 鍵引Ⅱ地点の推定路面

(6) 三本松Ⅱ地点

三本松Ⅱ地点は、20～40cmほどの表土層（黒色土）の下層に、堅く締った灰褐色土層が認められた。この地点の精査では、地表から37.5～40cm付近に、硬度15.5～21.0、幅400cmほどの地層を認め、古道の一部と考えられた。

側溝は明確でないが、東谷側に僅かな落込みを認め、西の山側には、側溝と推定できる地層の変化は確認できなかった。

また、この地点の上層には、幅の狭い硬度10前後のいくつかの堅い地層が認められた。この地層は、恐らく後代諏訪への近道として利用した山道の痕跡と思われる。

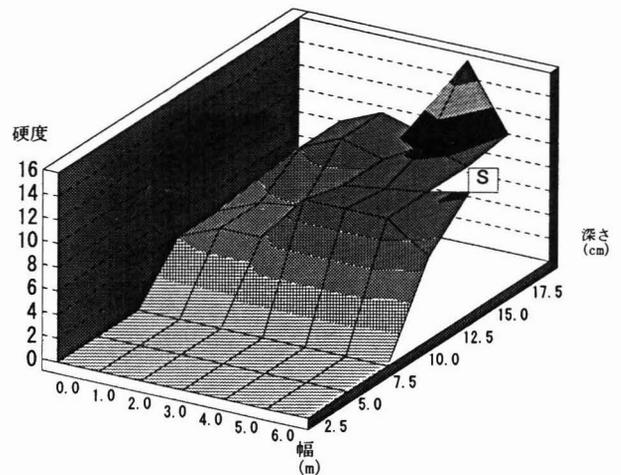


図7 箕輪平遺跡の硬度グラフ

(7) 中与惣塚北側の地点

中与惣塚の北側では、およそ10～15cmの黒色土層の下層に、堅く締った20cmほどの暗灰褐色の土層があり、側溝とみられる落込みはなく、最大幅は260cmであった。この地層の硬度は、東西両側

の計測値が3.5～4.0であるのに対して、路面と推定される地層の数値は10.0～18.0の高い計測値を示した。この地点には、法印塚の東脇から続く古道の跡が残り、鎌倉時代後期から室町時代初期の石塚（ケルン）があることから、中世の古道の一部と考えられる。

また、この地層の10cmほど下層に、硬度が18.0～22.0の高い数値を示す地層が検出された。この地層は、東西の幅がおおよそ360cmを測り、鳴石遺跡と鍵引遺跡を結ぶ地図上の考証から、こ

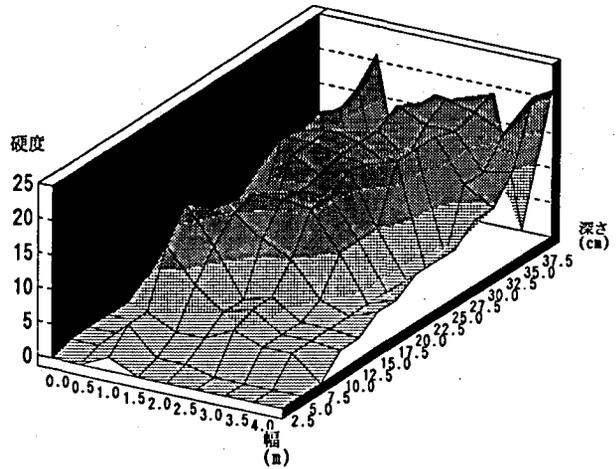


図8 中与惣塚北側の硬度グラフ

の付近を通っていたと考えられる古東山道の草原の道の一部と考えられる。

すなわち、中世の古道は、中与惣塚の付近で古東山道の道筋と複合している可能性があり、この地点が鳴石原遺跡に関係する古東山道の一部であろう。

5 須芳山の嶺道

蓼科山麓の嶺道の記述は、『令集解』卷二二「考課令・殊功異行」の条に、

「古記云、殊功、謂笠大夫作伎蘇道、須芳郡主帳作須芳山嶺道、授正八位之類也」

とあるのが初見である。

一志茂樹氏は、雑誌『信濃』(第5巻第7号)で、この記事を検証し、

「明らかに〔須芳山の嶺の道〕とある以上、峠といふより山の嶺つづきを過ぎて他地方に通ずる道を開いたといふことである。」

と述べ、この道を令制以前の古道、古東山道と考えている。また、一志氏は、この古道の雨境峠に向う道筋を「役ノ行者越」と推考している。

しかし、須芳(諏訪)山の嶺道が、令制以前に開かれた古東山道とするには検証すべきいくつかの問題がある。

前述のとおり、信濃の令制東山道は、『続日本紀』第二、大宝2年12月壬寅(10日)の条に、

「始めて美濃国岐蘇の山道を開く」

とある大宝2年(702)12月ころに開かれたと考えられている。当時の岐蘇(木曾)は、美濃国に属し、梶坂(鳥居峠)付近が美濃国と信濃国の境であったものと考えられる。

そして、『続日本紀』第六・和銅6年(713)7月戊辰(7日)の条は、吉蘇路開削の理由を、

「美濃信濃二国の堺、徑路險隘にして往還艱難なり、仍て吉蘇路を通す」

と記している。従って、古東山道が、神坂峠を越えて信濃に通じていたことは、『続日本紀』第六

の「美濃信濃二国の堺、徑路險隘にして往還艱難なり」の記事、神坂峠の出土遺物が、4世紀後半ころに遡るとされている年代の考証からも明らかである。

そして、令制東山道としての駅路は、『延喜式』に伊那谷を通る道筋が記され、善知鳥峠を越えて松本平に通じ、錦織駅から保福寺峠を越えて上田盆地に入り、浦野駅を通過して巨理で千曲川を渡り、信濃国府を経て信濃国分寺の前を通り、清水（小諸）駅から長倉駅を経て入山峠（碓氷坂）付近で東山道の道筋に合していたものと考えられる。

『萬葉集』卷第十四（3399）の「信濃道は今の壑道刈株に足踏ましなむ履着けわが背」の歌は、このとき開かれた信濃道、すなわち保福寺峠辺りの壑道を詠んだものであろう。

この歌の壑道については、和銅6年（713）に開かれた吉蘇道とする説もある。しかし、吉蘇はこのころ美濃国に属し、信濃道とは云い難く、保福寺峠辺りの壑道と考えられる。

令制による信濃の東山道、すなわち駅路は、『続日本紀』の記事などにより、大宝2年（702）ころ、はじめて開かれたものと考えられている。

また、『令集解』が引用する「古記」は、天平10年（738）のころの成立とされている。このことから、須芳（諏訪）郡の主帳が、「須芳山の嶺道」を作ったのは、大宝2年に開かれた「伎蘇道」とほぼ同じころとされ、東山道が開かれたところに地方道、地方の要路・「伝路」として開削されたものと考えられている。

また、「役ノ行者」道の開削の時期は明らかでないが、この道は蓼科山の西山麓を通る山麓の道・山裾の道であって、尾根を通る嶺道とは云い難い。

次に、佐久・小県郡両郡境の勾玉原遺跡・赤沼平遺跡は、6・7世紀に比定される土師器・須恵器を主体している。箕輪平遺跡出土の土師器は、4世紀後半ころに比定される神坂峠の遺物に類似するとの所見もあり、赤沼平遺跡出土の須恵器の坏破片にも初期の様式を示す古式のものが含まれている。

従って、この遺跡に関係する郡境の嶺道は、7世紀以前に開かれた古道の一部であることがわかる。須芳山の嶺道が、大宝2年から開かれ、和銅6年（713）ころに完成した「吉蘇道」と同じころ開かれた嶺道とすれば、蓼科山麓の嶺道との年代的な整合性はない。

すなわち、「須芳山の嶺道」は、8世紀初頭に須芳郡の主帳が開いた嶺道であり、諏訪郡内につくられた大門峠以南の尾根道ということになる。

この嶺道については、後の諏訪郡と佐久郡の境界をめぐる山論²⁶などから、赤沼平遺跡南方の尾根道筋の可能性が全くないとは云い難い。しかし、赤沼平から南方の古道は、猿小屋地籍の谷筋に下り、そこから先は、むしろ草原を通る平原の道であって嶺道ではない。

蓼科山麓に開かれた古東山道は、佐久郡と諏訪郡・伊那郡を結ぶ捷路であり、信濃国府を通る令制東山道が開かれた後は、地方の要路、すなわち伝路として活用されたものと考えられる。そして、須芳山の嶺道も、須芳郡の主帳によって諏訪郡への伝路として整備され、主帳はその功勞によって正八位を授けられたものであろう。

おわりに

蓼科山麓の祭祀遺跡群の鳴石・鍵引石は、蓼科の神・峠を磐石に招き降ろして、幣を手向け、旅の無事を祈った遺構と考えられる。巨石の周囲に積まれた集石は、神聖な祭祀の場所を示す磐境であり、巨石の北脇にある檀の古木は、神を招き降ろす勧請木と考えられる。檀の木は、いまも諏訪地方の人たちが「讃の木」と称し、神木の一つに含めている。

この遺構の築造時期は、出土遺物などから6世紀後半から7世紀初頭ころと推定される。峠の頂上に近い勾玉原遺跡・鳴石原遺跡の年代も、出土遺物から推考すると、ほぼ同時期ごろと考えられる。

また、角礫を用いた円弧状の配石が、鳴石遺跡で1箇所、勾玉原遺跡で3箇所発見された。この配石の性格については、現在十分に解明されていないが、敢えて論及すれば、峠の祭祀に関係する磐境の石組の可能性もある。特に、勾玉原遺跡の森谷雅美氏別荘の庭で発見された円弧状の配石の脇からは、大量の土師器片が採集されている。この配石の性格と両遺跡の年代は、今後の研究課題である。

赤沼平遺跡と箕輪平遺跡は、前述のとおり古式の須恵器と土師器が採集されている。赤沼平遺跡は、雨境峠にさしかかる山裾にあり、蓼科の神がおわす蓼科山の美しい山容が、S-54°-Eの方向に望まれ、峠の祭祀の場として優れた立地条件を備えている。

箕輪平遺跡は、池ノ平から三本松の斜面を下って本沢を渡り、猿小屋地籍の急な坂を登って赤沼平に向う草原にある。蓼科の神の山・蓼科山は、遺跡のS-30°-E方向に聳え、北方の赤沼平に向う場合も、南方の池ノ平に向う場合も、この場所を通る中間点の裾部の草原に位置し、古代祭祀の場選ばれた理由が容易にうかがえる。

蓼科山麓の古東山道が開かれた時期は、必ずしも明らかでない。神坂峠の出土遺物は、4世紀後半ころの遺物を含むと報告されているが、当然科野坂（神坂峠）と碓日坂（入山峠）の中間に位置する蓼科山麓の祭祀遺跡も、ほぼ同時期に比定される遺物を含まなければならない。赤沼平遺跡の遺物が、古式の須恵器や土師器を含むのも当然であり、4世紀後半に築造されたといわれる森將軍塚古墳が、大和王権の支配下にあったといわれる信濃の歴史的事実とも一致する。

蓼科山麓の古東山道の構造は、地形によって異なり、一様ではない。平原では、両側に簡単な側溝を掘り、傾斜面では山側に大きな角礫を並べて土留めとし、谷側に排水用の側溝を掘っている。また、鳴石遺跡の北方や鍵引Ⅱ地点のような湿地帯に隣接する場所では、山側に幅60cm前後、深さ30~60cmほどの大きな側溝を掘り、谷側の側溝には平石や角礫を並べて堅固な側溝を築いている。

これらの構造物は、古東山道が開かれた当初から築造されていたものではなく、歴史的過程で、しだいに改修され、整備されたものであろう。

蓼科山麓の古東山道の規模は、両側の溝心線の幅がおよそ400~450cm、推定路面の幅がおよそ350~360cmである。路面と推定される地層の土は、土間のタタキのように堅く締り、灰褐色、あるいは暗灰褐色を呈し、硬度およそ15~20であった。

因みに、蓼科山麓の南平地籍に残る戦国時代の信玄の上の棒道は、武田の騎馬軍団が佐久・小県地方の計略のために、幾度か兵馬を走らせた軍用道路である。この道の幅は、およそ180cmで、道の両

側に路面、あるいは周辺にあった大きな石を並べて側石とし、道の中央にも騎馬の軍勢が2列に並んで行軍できるように、分離帯状に30cm前後の角礫を並べ、路面の硬度は20前後であった。

古東山道の時代には、まだ軍馬はほとんど用いられていない。従って、古東山道の路面の硬度が、信玄の棒道に近い堅さをもつことは、この道が歴史的にも長く、大和の軍勢をはじめ、多くの人たちがこの道を利用し、往来したことを物語っている。

この研究は、平成3年に着手して以来、蓼科山麓における古東山道の存在・経路・構造などを明らかにし、ある程度の成果をおさめることができた。そして、蓼科山麓の祭祀遺跡群についても、多くの新知見を得、今後の研究の参考に資するであろう。

今後さらに、周辺地域に調査範囲を広げ、この研究課題を追究したいと考えている。

注

- 1 「続日本紀前篇」『新訂増補国史大系』P16 吉川弘文館 昭和46年
- 2 「古事記祝詞」『日本古典文学大系 1』P217 岩波書店 昭和33年
- 3 「日本書紀上」『日本古典文学大系 67』P307-308 岩波書店 昭和42年
- 4 宮坂英弼・宮坂虎次『蓼科』尖石考古館 昭和41年
- 5 『北佐久郡志』第2巻歴史篇 P79 北佐久郡志編纂会 昭和31年
- 6 一志茂樹「我が国中部山地上代交通路の一性格(承前)」『信濃』第5巻第7号 P28
- 7 大場磐雄「峠神の祭祀とその遺物」『神道考古学論攷』葦牙書房 昭和18年
- 8 藤森栄一『古道』P192 学生社 昭和41年
- 9 八幡一郎「北佐久郡の考古学的調査」北佐久教育会 昭和9年
- 10 雨境峠祭祀遺跡群発掘調査団『雨境峠』P34 立科町教育委員会 平成7年
- 11 大場磐雄「雨境峠」『まつり』P77-78 学生社 昭和42年
- 12 桐原健「長野県北佐久郡立科町雨境峠祭祀遺跡群の踏査」『信濃』第19巻第6号 P57
- 13 注8に同じ
- 14 注9に同じ
- 15 注10に同じ P37
- 16 注10に同じ P68-69
- 17 長野県『長野県町村誌』東信篇 P2519 長野県町村誌刊行会 昭和11年
- 18 注8に同じ
- 19 注9に同じ
- 20 宮坂英弼・児玉司農武・宮坂虎次「長野県大門峠割橋遺跡発掘調査報告」『考古学雑誌』51-1 昭和40年
- 21 「令集解第三」『新訂増補国史大系』P396 吉川弘文館 昭和30年
- 22 注6に同じ

- 23 「延喜式後篇」『新訂増補国史大系』 P713 吉川弘文館 昭和47年
- 24 「萬葉集三」『日本古典文学大系 6』 P421 岩波書店 昭和35年
- 25 大場磐雄『神坂峠』阿智村教育委員会 昭和44年
- 26 「立科山小諸・高島領出入裁許状」『長野県史近世史料編』第2巻-2 P43~44
- 26 森將軍塚古墳調査団『史跡 森將軍塚古墳』更埴市教育委員会 1992